

仙台市若林区 20代 男性 会社員



無我夢中で運んだ仮設トイレ

もし妻や子どもがいたら？

勤務している会社が、仮設トイレなどをリースする業務を行っていたこともあり、震災直後から、避難施設などにトイレを配送する仕事に追われていました。

トイレを保管しているセンターは山間部にあり、それをトラックに積んで指定の避難施設まで運ぶのですが、限られた燃料の中でいかに効率良く運ぶか、速やかに届けることができるか、それだけを考えていました。

途中の道路ではアスファルトが割れていたり、マンホール部分が盛り上がっていたり危険な箇所も多々あり、本当に無我夢中でハンドルを握っていたことを思い出します。

センターでは男性社員3名がカンヅメ状態となり、自分の家族の安否確認やケアよりも避難先施設への支援を優先させていきました。

私自身、まだ独身なので、両親の無事を確認した段階で脇目も振らず仕事に専念していましたが“もし妻や子どもがいたら？”と、いまになって考えることがあります。

それでも“トイレがきて本当に助かりました”という声を聞いたとき、未曾有の震災という非常時に、みなさんの役に立つことができてよかったと思っています。





イベントの最中に地震が発生

自宅への道順が分からない方をサポート

震災の当日は、商店街入り口の広場で開催されるイベントの初日でした。地震が起きた時間は、人出のピークは過ぎていましたが、普段の平日より人通りが多くて、軽く1000人以上はいたと思います。

大きな揺れがなかなかおさまらず、お客さんに店内に止まってもらうか、それとも屋外に避難してもらうか迷いましたが、店内は危ないと判断して、お寺の境内にある広場に避難してもらうようにしました。

皆さん無事で安心しましたが、本当に大変だったのはその後です。電車が止まってしまい、駅にどんどん人が集まっていくのが見えました。それから地下鉄が動き始める夜11時過ぎまで、歩いて自宅まで帰る人々が国道に溢れ返ったのです。

商店街のメンバーで帰宅困難者のサポートをしましたが、意外だったのは、自宅まで帰る道順を知らない人が多かったことです。普段、電車で移動するから分からないのでしょう。大勢の人から道を尋ねられました。





帰宅困難者受け入れへの不安

秩序正しく行動する日本人の姿を見た

地震発生後に池袋駅の近くを通ると、泉から水が湧き出すように人が溢れているのを目にしました。やがてその人々の一部は、我々の大学で受け入れることになります。その際に感じたのは、知らない人たちを受け入れることへの恐怖感でした。実際に帰宅困難者を受け入れてからは対応に必死でしたが、後に私の心配は取り越し苦労だったことが分かりました。

トータルでおにぎり2600個、水3000本、クッキーなど1500袋を配りましたが、奪い合いもトラブルも起こらず、不満を言う人もいませんでした。あれだけの人数を受け入れたのに、盗難も破損も汚損もない。秩序正しく、周りの人々に配慮をする日本人の姿は美しく立派に感じました。

後日、感謝の手紙を何通かいただきました。お礼を言われるためにしたわけではありませんが、正直嬉しかったですね。今回は様々な偶然が重なって上手く対応できましたが、次はどうなるか分かりません。インフラが切断されたら、または一晩ではなく二晩、三晩と続いたら、そう考えての対応も今後、考えなくてはいけないのかもしれません。





命を救ったご近所づきあい

改めて実感するお付き合いの大切さ

このあたりの地域性なのかもしれませんが、このあたりでは顔見知りがほとんどです。今回の豪雪でも、日ごろのお付き合いのおかげで、尊い命が救われました。

ある人が、近所のお宅の前を通りかかったところ、軽トラックのライトがつきっぱなしになっているのを見つけたんです。「この人は、そんなことをする人じゃないけれどもなあ？」と思い、様子を見に行ったところ、なんと家の人が屋根から落ちてきた雪に埋もれていました。すでに低体温症に陥っていたそうです。気づかれなければ、亡くなっていたと思います。顔が見えるお付き合いの大切さを、あらためて実感させられる出来事でした。



安来市 50代 男性 市役所職員



放置された車が引き起こした大渋滞

持ち主はパニック

峠の頂上付近に軽自動車が放置され、交互通行になっていました。警察に持ち主を照会してもらい、本人に役所へ連絡するようにお願いしました。すると、若い女性から電話がありました。どうやら普通タイヤで走行していて峠の山頂付近で動かなくなってしまい、どうすることもできなくなり車を置いてきてしまったそうです。

こちらでレッカーするけど、緊急時の移動なので、車体にキズがつく可能性があることを了承してほしいと言うと、「困ります！明日も仕事で使うからダメです！」と…まあ、こんな具合で押し問答になりまして。結局、現場の方でエイヤツと対応したんですけどね。

翌日、車の持ち主から、「昨日は申し訳ありませんでした」と、別人のような感じで電話がありました。同一人物だと気づかず、「どちら様ですか？」と尋ねたくらいです。自分ではどうにもできない状況だったうえに、役所や警察からいろいろ言われ、おそらくパニックになったんでしょうね。



一日前プロジェクト みんなでやってみよう!

----- 簡単な手順を紹介します -----

まず、過去の自然災害(地震、水害)の中から対象を選ぶ

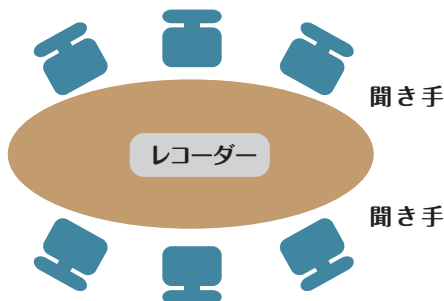
その災害の被災経験者や災害対応経験者に声をかける

みんなが集う場所と時間を設定する

※所要時間は2時間

なごやかな雰囲気の中で、当時を思い出しながら、体験したり感じたことを話し合ってもらおう

※話し手は、2~4人が適当



「教訓」や「知恵」につながる部分を拾い出し、タイトルをつける

テープ起しなどを基に、拾い出した部分を物語にする

※物語は、300~500字程度で、できるだけ切り口を残して編集

※物語の情景をあらわすイラストや写真等を添えると効果的

作成した「物語」を地域や職場のみんなに読んでもらう

気づき

共感

反省

「一日前プロジェクト」とは、地震や水害などの自然災害で被災した方や災害対応の経験をもつみなさまにお集りいただいて、

- 被災前後の行動
- 体験を通じて上手くいったと思うこと、失敗したと思うこと
- もう一度災害が発生したならば、次はどのように行動したいか
- そのために日頃から何を準備しておけばよかったか

といった本音の話をお聞かせいただき、これらの話から導き出されるさまざまな教訓や身につまされる体験をショートストーリー(エピソード)に取りまとめるという活動です。

こうして取りまとめたエピソードを広く活用・普及させることで、地域のコミュニティや国民一人ひとりに、防災・減災への関心や意識を高めていただくことを目的としています。

ここで紹介する物語は、ほんの一部です。一日前プロジェクトから生まれた物語は、内閣府の「災害被害を軽減する国民運動のページ」<https://www.bousai.go.jp/kyoiku/keigen/ichinitimae/index.html>に掲載されています。ぜひ、アクセスしてみてください!きっと、あなたの心を動かす物語が見つかるはずです。

■一日前プロジェクトの物語・イラストは、非営利の目的であれば、広報誌やパンフレットなどで自由にお使いいただけます。「災害被害を軽減する国民運動のページ」(<https://www.bousai.go.jp/kyoiku/keigen/>)からダウンロードしてください。



発行 内閣府(防災担当)

〒100-8914 東京都千代田区永田町1-6-1(中央合同庁舎8号館)

TEL 03-5253-2111 URL <https://www.bousai.go.jp>

